

といたしますと



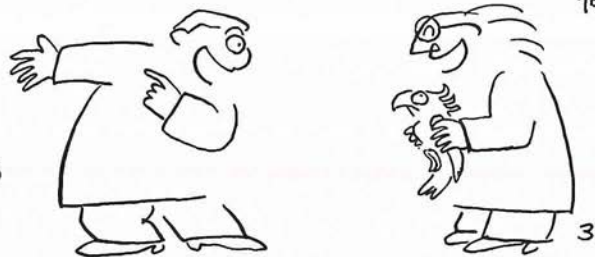
オウム足のうらの
感度を
超高性能にしたぞ

非生物の考え……!?

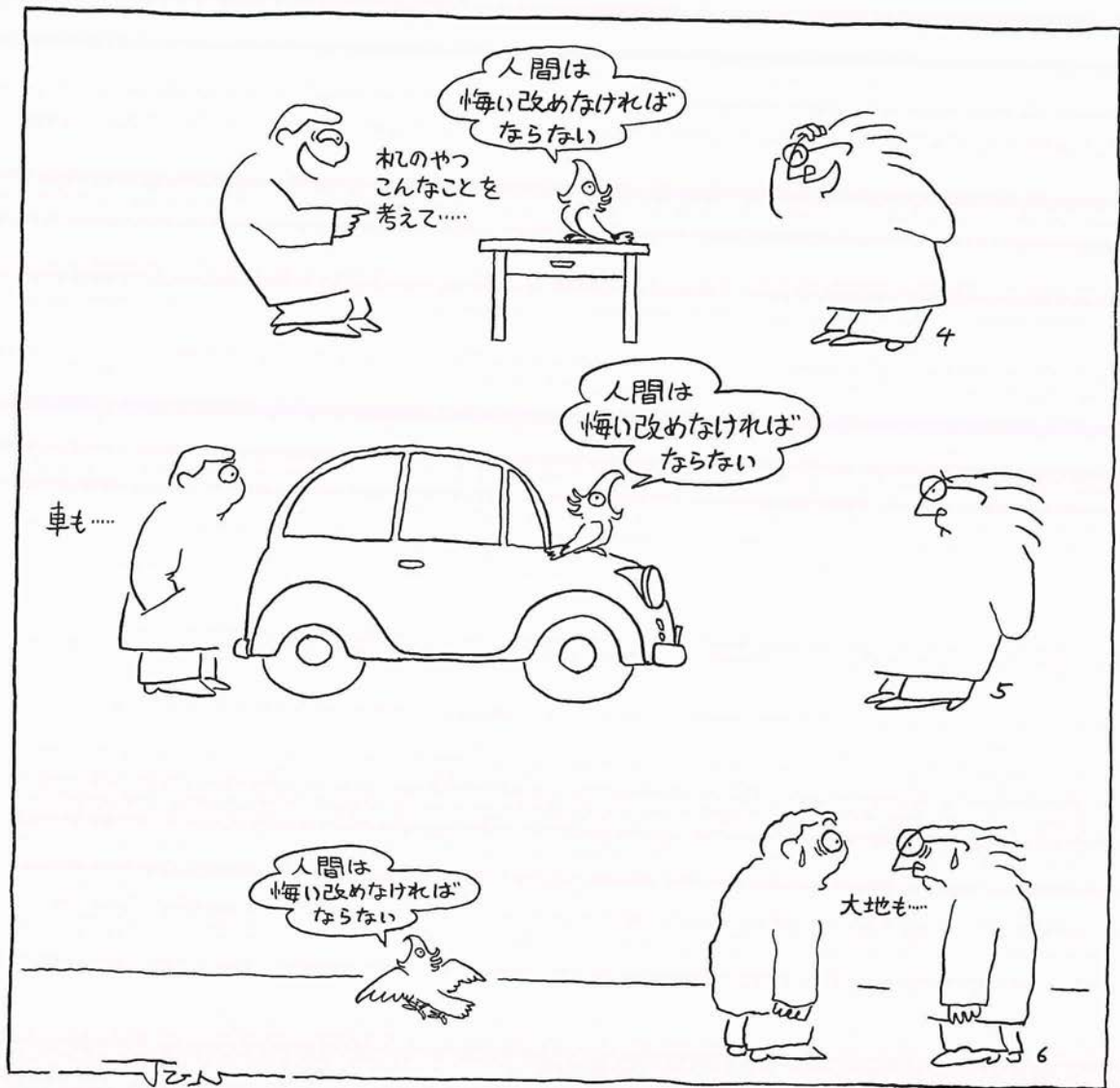


非生物の考えまでも
足のうらで"読みとり"
ことばにするのじゃ

それ、全部
やってみましょう



机、車、大地にいたるまで
何でも"読みとるぞ"



最後の一人まで

大谷 成章（フリーライター）

剪画／とみさわ かよの

またまた略号を持ち出して恐縮だが、震災後に生まれたグループに「CAS」というのがある。NPO、NGOの団体で活動している人たちや、ボランティアや、大学教員、ジャーナリストなど30人あまりが名前を連ねているネットワークで、震災復興の現状を市民の目で検証しながら、市民が自律して新しい社会を築いていこうと、日ごろの行動目標を提案してきている。

Civic Action Syndicateの略で「市民社会推進機構」ともいうが、堅苦しい言い方より「キャス」、あるいは「シンジケート」で通している。シンジケートにはマフィアなど犯罪組織をさす意味もあるが、ニュースなどを配給する組織のことでもあって、なんとなくいかがわしい雰囲気が入っている。

もともとは、震災後3年目に「市民がつくる復興計画―私たちにできること」を発行したことに始まった。2001年には『市民社会をつくる―震後KOBEBE発アクションプラン』を発行し、昨年は『大震災10年―市民社会への

発信』を発行した。

まちづくりや福祉の分野で活動している人たちにヒアリングしたり、メンバーそれぞれの活動についてときには徹夜で議論したりして、被災経験を基盤にした新しい社会のあり方を探った本だ。インド西部地震や台湾中部地震、新潟の中越地震で、現地へ救援に出かけたボランティアたちから、これらの本が参考になったと喜ばれている。（実はこの3冊の本の編集統括にあたったのは私なのでありまして、ここまではPRです）

そのシンジケートが、昨年暮れに、ポスト震災10年の展望を「たった一人に視点再び」という報告書にまとめた。

この中で、阪神・淡路大震災で大ケガをした人たちのその後のことが語られている。死者の無念を語りつくすことはこれからもできないだろうけど、ケガの後遺症に悩んでいる人たちのことは「忘れられた存在」になっているのではないだろうか。

ピアノの下敷きになって脳機能障害になった娘をもつ母親は、東遊園地にある「1・17希望の灯り」の碑文に異議を申し立てている。

「碑文には、震災が奪ったもの、命、仕事、だんらん、まちなみ、思い出、とありますが、どうして命の次に『元気なからだ』がないのでしょうか。だから私には希望の灯りはありません」

神戸新聞の記者は、この「忘れられた存在」に目を向けて取材を始めたが、県や市は震災で障害者になった人の数や実態をまったくつかんでいないことを知った。行政の障害者施策は、原因には関係なく対策をとるとして、実態把握の必要を認めていないのだ。

記者は、震災による障害者は、家族や財産も同時に失っている人が多く、キズは深い、と指摘し、さらに「長期間入院していて、みんなと

いっしょに復興していく過程を経験できなかった。そこがけっこう大きい」と語っている。

中越地震で、がけ崩れにあつて車の中に閉じ込められた皆川優太くんが、4日目に東京消防庁レスキュー隊に救助されたときは、だれもがほっとした。2003年のアルジェリア地震で日本の国際緊急援助隊の救助チーム61人がパリを経由して39時間後に現地に入り、21歳の男性をがれきの下から救出した。

多くの人たちが、多くの経費を使つても、人を助けるために努力する姿は高貴なものに見える。たった一人であっても、救出されたと聞けば、命のかがやきをそこに見た、と思う。

シンジケートのメンバーは、最後の一人まで復興できる社会のあり方を、こつこつ追及している。あのキズから、最後の一人までが立ち上がらないと、全体が立ち上がらないと確信しているからだ。



詩画集「神戸、あの日より—1995・故郷」から掲載 「桜並木(東灘区)」

■大谷 成章(おおたに・しげあき)1939年但馬生まれ。元神戸新聞記者。震災当時は月刊神戸子編集者。その後フリーライター。「阪神・淡路大震災10年」(共著 岩波新書)など。

続足立先生

出石 アカル

絵・菅原 洸人

題字・六車明峰



前号で足立巻^{あだちけんち}「先生のことを書いたが、もう一度。」

今回は、先生と初めてお会いした時のこと。

「いやあ、わたしが早く来すぎたんですよ」

もう二十三年もの昔、子どもの通う小学校のPTAの世話をしていた時に、「子どもの世界」という題で、先生に講演をお願いした時の話である。

約束の時間に最寄りの駅へお迎えに行くこと先生は、道路の方に体の正面を向けて、コート姿でスックと立っておられた。わたしは先生のお顔を知っているが、先生はわたしをご存じない。わたしが見つけやすいような姿勢で待っていて下さったのである。

「大分、お待ちになられたのでは？」と言ったのに答えての、先の「いやあ、わたしが早く来すぎたんですよ」という言葉である。

講演にはまだ少しばかり時間があつたので、「汚いところですけど」とお誘いすると、思いがけなく気軽に拙宅にお寄り下さった。

ソファーに並んでかけさせていただき、書きためていたわたしの子どもの、口頭詩のノートを見ていただいた。先生は真剣に目を通して下さった。一つ一つをていねいに、お茶に手をつけるのも忘れて、じっくりと読んで下さった。そして、いくつかについて、「これなんかいいですねえ」などと感想を述べられたり、質問をされたり、少しも飽きられる様子がない。わた

しの方が迫る時間を気にして「先生、もうそろそろ」と声をかけると、いかにも名残惜しうに、「いずれまた」と、ノートを置かれた。

講演会が始まる前、わたしの力不足で会場を満席にすることが出来なかったことをお詫びすると先生は、

「わたしは何人でもいいですよ。二人でも三人でも。少ないほうが話しやすいですから、気にしないで下さい」そして、「あなたも今日まで随分気をもまれたでしょう」と言って下さった。

多忙をきわめる先生に頼んでしまったことで、本当に実現するのだろうか、何か不都合が起こりはしないだろうかと心配していたわたしの心の内を読んでおられたのだ。いま思い返しても、限りなくやさしい人だった。

この時の講演会の録音テープをわたしは保存して、テープ起こしをした冊子を手作りした。まだ何冊が残っているので、小さな子どもさんやお孫さんをお持ちの、ご希望の人五人に差し上げます。「神戸っ子」までお申し出ください。

* * *

話は変わるが、昨年の晩秋、足立先生と懇意だった宮崎修二郎氏（神戸史学会代表）の案内で、加東郡の播磨中央公園にある足立先生の詩碑を初めて訪ねた。

宮崎先生は博覧強記の人。兵庫県文学界の生き字引でもある。文学上のことで疑問があれば、この人に聞けばたちどころに解決する。この人もわたしは、先生と呼ぶほかはない。なぜかわ

たしの店を気に入って下さり、よく顔を見せて下さる。わたしはこの人から、足立先生が生前、「どや、これええやろ」と言っておられたという、形見のトンビをいただいて大切にしている。時に着てみたりして。

さて詩碑だが、現地に着いて驚いた。「盤座いばくらが燃えている！」という詩句が思わず口をついて出た。足立先生の詩「盤座」の一行である。先生の詩碑の上で、楓が真っ赤に紅葉していたのだ。碑文は「日本の詩は／神の御名から／はじまる」。

で、帰りに宮崎先生に案内してもらって、その盤座の詩の舞台になった場所、神崎郡の田川神社まで足をのびした。見事に盤座が燃えていてわたしは感動した。以下、足立先生の著書『石の星座』から引いてみる。

「社殿からまっすぐに直線を延ばしてみてそれを目でたどると、神体山の頂上のすぐ下に白い岩石の露出が見え、そのひとつどころ、火のように真赤に染まっている。盤座が燃えている！と一瞬思った。紅葉しつくしたカエデの木でもあって、そこだけ午後の陽があたっているらしい」

もう一度書く。「足立巻一と天秤の仲間たち」展が、この3月14日より、「原田の森ギャラリー」で始まる。18日午後には宮崎修二郎氏の講演も予定されていて楽しみにしている。

※次号ではまた、元に戻って「コーヒーカップの耳」が聞いた話を書きます。

■出石アカル（いずし・あかる）一九四三年兵庫県生まれ。「風媒花」「火曜日」同人。兵庫県現代詩協会委員。詩集「コーヒーカップの耳」（編集工房ノア刊）にて、二〇〇二年度第三十一回ブルーメール賞文学部門受賞。

「五線紙の街」 神戸を彩った人たち

文・宮田 達夫

絵・中西 省伍



放送プロデューサーの田宮三郎は、相変わら

ずイベントの打ち合わせなどで奔走していた。

ある日デスクの電話が鳴った。取り上げると

生田神社の加藤隆久宮司からだ。なんとなく声

に元気が無いように感じられた。

「田宮さん、美代子さんが会いたがっているん

だけど」

「会いたがっているって？」

「あんた、何も聞いていない？
美代子さん入院してるんよ」

「えっ？どこに」

「神戸のホスピス」

「病気は？」

「ガン」

「じゃ急がなくちゃ」

「大画伯とあんたに会いた
いんだって。あまり長くないら
しい、会いにいつてあげて」

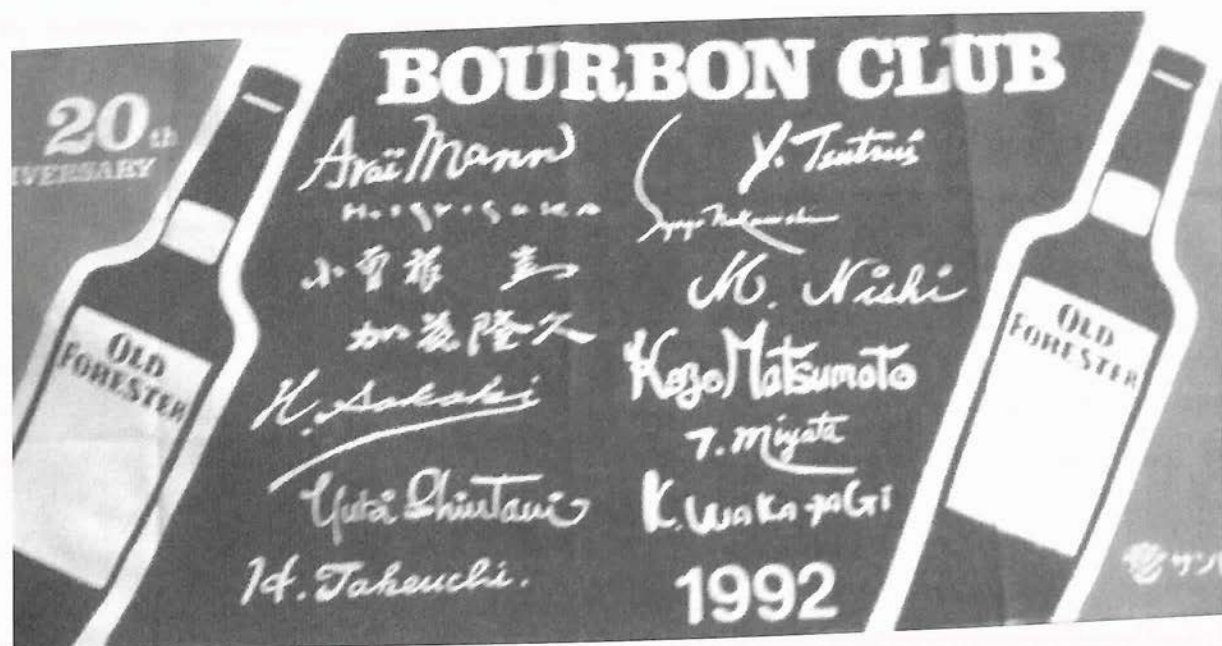
加藤宮司の声にも元気が無
かった。

電話が切れてすぐに大画伯
に連絡した。大画伯は絶句し
た。

田宮は、真っ赤なバラを持
って行こうと思った。その前
にバーボンクラブの旗を作ろ
う。以前にメンバーが亡くな
ったとき、これからはアメリ
カみたいに送り出すお棺に旗
が要りますねと誰かが言った
のを思い出したからだ。

言ったのは大画伯だった。

その晩、裁縫の上手な友人
の母親に依頼して、バーボン



バーボンクラブの手ぬぐい

クラブ二十周年のとき記念に作った大画伯デザインの日本てぬぐいで、暖簾を作ってもらった。

翌日、花屋で真っ赤なバラ五十本を買い、暖簾を持ち、大画伯とタクシーで中西美代子が入院している神戸アドベンチスト病院に向かった。タクシーの中で大画伯の顔はこわばっていた。「私、こういうの弱いんです」

病院は山の中にあり、周辺には花が咲いている。エレベーターで三階に上がり、ナースステーションで名前を告げ面会を申し込んだ。「患者さん、具合がいいようなのでお会いすると言ってます」

ナースが部屋まで案内してくれた。ドアを開けるといつもの顔をした中西美代子がベッドの上にあった。壁には鴨居玲の若いときの油絵が掛かっていた。美代子は田宮と大画伯の顔を見るといきなり、

「私、死ぬねん」
そう言うのと泰然と笑った。何の返事もしようがない。
「美代子さん、このバラ活けないで床に敷き詰めて。それとこれバーボンクラブの暖簾」
「本当？うれしい」
「こころの底から嬉しそうな顔をした。」

「ねえ、聞いて。私ね市民病院で人間ドッグに入ったのよ。で、何ともないと言われて、そのままにしていたの。でも何となく具合が悪いので別の病院で診てもらったの。そこでも異常は無いですから大丈夫と言われたので、そのまま外国に旅行に行ってしまったの。ところがその病院でよく調べたら大変だということになり、私を探したけど留守だからどうしようもない。私が旅から帰ると、病院からすぐ来て下さいという手紙がポストに入っていて、何かと思つて行くと胃がんですというわけ。手術しても難しいというので、私もショックだったけど、弟の方がもつと驚いて、ここも弟が探してくれたの。とてもいい病院で、苦しくなったら薬にしてくれるので安心して居るの」美代子は一気に話した。

病室内のバスルームのドアが開いていて、そこにピンク色のブラジャーとパンツが干してあるのが何となく女の部分を感じさせた。美代子はさらに続けた。
「ここねえ、外国からの見学者が多いの。私、模範患者なのよ。それと会いたくない人には会わなくて済むの。この間も○○さんを追い返してやったわ。ねえ死ぬんだもの、会いたくない人に無理に会うことないでしょう」



嬉しそうにいたずらっぽく話すが、田宮も大画伯も作り笑いしかできない。それに美代子に弟がいたなんて二人とも初めて聞いた話だった。「でも会えてよかったわ、田宮さんにも大画伯にも。宮司にお願いしてたの」

大画伯はうんうんとうなずくので精一杯の様子であった。

「これ、鴨居さんの若いときの絵。県立近代美術館に寄付したの。でもしばらくここに置かせてくれるの」

死ぬまでとはさすがに口にしなかった。絵は、

美代子がベッドに寝たときに正面に見えるところの壁に掛けてある。

大画伯も田宮も未来の話題をできないところに苦しさがある。永い沈黙が続いた。沈黙が続くほどどうしようもない気分が襲われる。言い出す言葉が無いということも苦しい。

「疲れるといけないからぼちぼち」と言うと、
「そう、来てくれてありがとう」

美代子にはこやかな顔でそう言った。田宮はサヨナラを言えない苦しい気持ちの中で、

「バラ、床に敷き詰めてね。暖簾はかけて」

と言うと、美代子は可愛い笑顔を返事の代わりにした。言葉にならない。エレベーターの所まで送ると言うので、三人は無言で歩いた。

「ではね」

中西美代子は美しい手を差し伸べた。大画伯は無言で、お大事にと、またねとも言えない。言う言葉がないとはこのことか。

最後の握手でお別れである。心の中がジーンと来るのを抑えて美代子の顔を見ていた。

エレベーターのドアは、遠慮なくその間をフエイドアウトした。非情な動作であった。言い換えれば、テレビでよく見る、ワイプで拭い去る画面のようだった。

田宮は、別れるときどうして美代子を力一杯

抱きしめなかつたか、エレベーターの中で悔やんだ。人間の別れとはこんなものなのか。帰る車の中で、二人とも心の中と頭の中は空白だった。

それから一週間後に「ちよつと苦しんだけれど安らかに亡くなりました」と病院から連絡が入った。早い。人の寿命とはそんなものか。もう少し行くのが遅れたら会えないところだった。

早速病院に駆けつけると、美代子は綺麗にお化粧され、あのバーボンクラブの手ぬぐいで作った暖簾が体にかけてあった。彼女は、田宮と大画伯が訪ねた後、暖簾をひどく喜んでいて、死んだら巻いてほしいと話していたということだった。側に飾られている写真は、どこかで見た写真だと思つたら、去る一月にホテルで開いたバーボンクラブの時、撮影した全員写真から、彼女の顔を引き伸ばしたものだ。この写真がどうしてもいいと本人が希望したそうだった。年齢不詳の中西美代子は、享年六十六歳だった。

中西美代子に弟がいることは、死ぬ間際の彼女の口から、みんなが初めて聞いた話だ。田宮はこの際、美代子のことをもう少し知りたいと考え、思い切つて弟に尋ねた。

弟の話は断片的で、次のようなことであつた。

大阪のどこに住んでいたかは不明だが、女学生的美代子は絶世の美女で、セーターで歩くその姿は、男子学生の目をいやがうえにも集めたという。

本好きの美代子はいつも本屋に行き、音楽や美術の本を好んで読んでいた。大阪淀屋橋にある朝日生命ホールで音楽の演奏会があるときはいつも弟を連れて行つた。そのため弟はいつも友人から、姉さんを紹介しろとしつこく迫られていたそうだった。

美代子は二十一歳の時に、神戸の金持ちの一人息子と結婚したが長男を生んだ後すぐに離婚した。原因は不明。芸術が大好きで激しい気性的美代子にとって、普通の男では満たされなかつたのではないだろうか、というのが弟の一言。離婚した前後から、美代子は鴨居玲という画家と親しくなつたそうだった。どうして親しくなつた

かは不明だ。

不思議なことに、美代子の両親の話がまったく出てこないし、まったく知る人がいない。弟の口からも出てこない。叔母は神戸の有名な老舗店で、美代子は叔母のところに居候していた。この叔母も綺麗な姪が可愛くて仕方がなかったようだという。

鴨居玲がパリに留学する時、一緒に行こうと誘われたらしいが、美代子はなぜかこれを断ったのだ。一人でパリに行った鴨居玲からしばしば綺麗な絵葉書が美代子の所に届いた。彼女はその葉書を大切にしていたという。

美代子の数奇な人生は更に進む。居候していた老舗店の叔母の息子が、出征して戦死してしまう。美代子の運命も、これが原因でこの先の人生が変わったのだろう。跡取りのいなくなった叔母は養女を迎えるのである。そうした中でも美代子は叔母の温かい愛情に恵まれ、時には店先に座り、看板娘の役割をしたりして、手助けをする傍ら、ちよつとヨーロッパに行きたいと言うと、叔母は気前良く費用も出して送り出していた。

歳をとってきた叔母は、養女に婿を迎えた。

人生は不思議なもので、頼りの肉親は叔母だけ、この叔母が死んでしまったら、美代子の周囲は赤の他人だけになっていた。それで、店に座り商売の手伝いもできない立場に追い込まれたのだろう。弟が記憶をたどり話してくれた物語はここまでだ。

それで中山手のしもた屋に住み、やがてそこも出ることになり須磨に移ったのではないだろうか？ これは推測である。店先に座っていたのが、そうできなくなったとき、そこで偶然外で出会った人に、私の家そこのという話は成立するし、また須磨に居を移したのは、一弦琴の心であつたかもしれない。

もう一つ不思議なのは、美代子が嫁いですぐに生んだ男の子の行方だ。親しい人でも、美代子が男の子を連れて歩いている姿を見た人はいないという。



■宮田達夫(みやたつを)
一九三六年東京生まれ。毎日放送入社、大阪府警・大阪市・万国博などの記者クラブ担当。MBSナウ担当後、報道局兼事業局長の二足のわらじで、放送記者として宝塚歌舞伎を取材。イベントプロデューサーとしても活躍。元事業局長。バーボンクラブ会員。フリージャーナリスト。



神戸J.C生田神社参拝
 ▲2006年度(社)神戸青年会議所理事構成メンバーが生田神社に集い、本年度の事業の成功を祈念した。



こうべ芸文新年会

▲1月23日、ホテルニューオータニでこうべ芸文(神戸芸術文化会議)新年会が開かれた。写真は、昨年度に新入会の文化人たち。



兵庫県日韓親善協会に集う
 ▲日本と韓国の友好を深める活動を続ける兵庫県日韓親善協会の理事会が、1月25日クリスタルホールで開催された。



盲導犬チャリティコーラスフェスティバル

▲NPO国際音楽協会主催の「盲導犬チャリティコーラスフェスティバル」が、1月28日長田区のビレホールで開かれた。約30のコーラスチームが参加。盲導犬訓練のデモンストレーションも行なわれた。



小川荒野展

▲さすらいの画家、小川荒野が神戸にやってきました。19歳で家を飛び出し、世界中を放浪した絵描きの眼が捉えた絶妙な構図は心地よい余韻を与え、リズムカルなタッチと詩的な色遣いの作品が聴く者を、「十三月の旅」に誘った。ギョムリエサンカゴにて。

コウベスナップ

Tell-Net設立宣言

▲震災での被災体験と教訓を、広く世代を超えて語り継ぐ「世界災害語り継ぎネットワーク(世之色)」が設立され、記念フォーラムが国際協力機構兵庫国際センターで開催。世界14カ国の災害被災地から関係者が出席、神戸に本社を置くP&Gなどの企業も協賛する。





スペイン料理を食べる会

▲兵庫県国際交流協会主催のスペイン料理を食べる会が、2月1日北野のスパニッシュカフェレストラン「ラス・ランプラス」で開かれ、約50人が集っておいしいスペイン料理に舌鼓。

安達流花芸フォーラム

▲花芸安達流(安達彌子主宰)の兵庫県支部・大阪府支部・奈良県支部主催の花芸フォーラム(育と共)が、2月11日兵庫区の神戸大材会館にて開催。昨年副主宰に就任した安達育さんが来神し、手作りの花器で楽しく花を生け、最後は参加者一人一人の作品を見て、講評を述べた。



生田さん節分祭

▲2月4日の節分の日、生田神社では恒例の豆まきが行なわれ、大賑わい。

平成18年中央区民新年会

▼中央区の新年会が、2月7日相楽国会館で開催された。



石阪春生画伯を囲む夕べ
 ▲「Barbe」で、石阪春生画伯を囲み、富田達夫さん、故小堀良平画伯の長女の舞納舞子さんが集った。



第17回キタノサーカス カトリーヌ劇場

Kitano Hot News

映像作品上映会「陰と影が奏でる日本の美」

キタノサーカスの「カトリーヌ劇場」は、2~3ヶ月に1度、珠玉のアートパフォーマンスが行なわれる小さな劇場。今月のプログラムは、兵庫県内の「建築物」にスポットを当てた異色の4作品を上映する「陰と影が奏でる日本の美」。

映像を制作したのは、藤原次郎さんと奥村恵美子さんの映像制作ユニット「RaRa Project」。大震災で被災した建築家が六甲の山荘を設計した際の思いを映像化した作品や、屋敷の縁側にスポットを当てた作品など、いずれも過度の解説や意図を排除し、見る者



の感性を刺激するもの。これらはパリ、ブリュッセルでも上映され、好

評を博した。「いかにもジャパニズムといった歴史的で古い建築か、高層ビルのような最新の建築物が、これまでの日本の建築イメージでした。私たちはそうではなく、過去から現在につながる建築を通し、日本人に息づく普遍的な精神文化を表現したかった」と、プロデューサーの奥村恵美子さん。当日は、奥村さんと、作品にも登場する建築家・石丸信明さんのトークも予定されている。



奥村さん



藤原次郎さん



建物、住むことにスポットをあてた4作品を上映

- と き 3月26日(日)15時開演
- と ころ キタノサーカス
神戸市中央区北野町4-9-6
- 会 費 3500円(予約)・4000円(当日)
1ドリンク付
- 予 約/問合せ 078-221-9294
(キタノサーカス)



KITANO GARDEN

北野ガーデン

神戸市中央区北野町2-8-1

TEL078-241-2411(代表)

<http://www.kitano-garden.com/>

炭焼料理 西洋料理

RESTAURANT

Goody
KITANO

グーニー北野

神戸市中央区北野町2-7-18

リンズギャラリーB1F

TEL078-242-2562



スバニッシュカフェレストラン
ラス・ランブラス

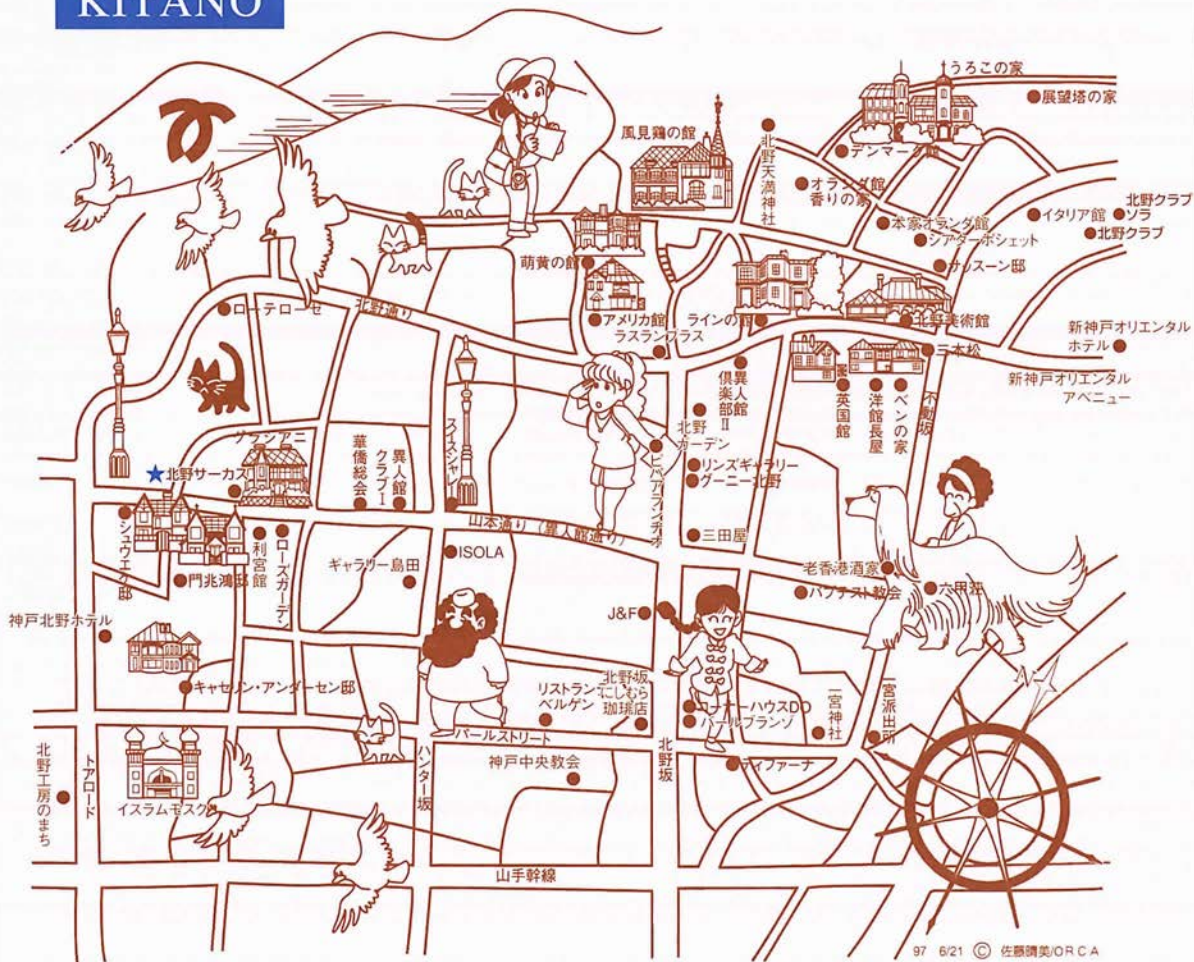
神戸市中央区北野町3-6-17 アキラビルB1

TEL/FAX078-222-3740

<http://www.jin.ne.jp/las/>

坂のある町・散歩道

KITANO



★今回の取材先「キタノサーカス」

97 6/21 © 佐藤晴美/ORCA